

水俣調査全体レポート
過去に学び、ここに生きる希望を作った水俣物語

2014 東京財団週末学校
広島県尾道市 倉田 麻紀

水俣に行くと答えると、水俣病、公害、という単語と繋がるだけで、なぜそこなの？公害の勉強？なにか観光するとこあるの？と、ほとんどの人に聞かれた。

事前課題図書や事前の講義で、水俣の取り組みは学んでいたの、「公害を乗り越えて、日本でも世界でも唯一、再生したまちなんだよ。環境都市水俣と言われるほどなんだよ」と答えてはきたものの、実際の凄さは、本や講義で感じたこととは比較にならないレベルだった。

水俣市は、見た目が際立って素晴らしい町、というわけではない。地方によくある、すこし寂れた街並みの、特になんてことはない町。

だけど、ここで出会った人はすべて、際立って素晴らしかった。過去をきちんと学び、今を生きる。行政に乗せられて、表面だけ、もしくはいやいやながらやっている人など、いなくて、ちゃんと希望と目標を持って生きていくことを選択した人たちがいた。

その人たちが作り出すものが、物語をもった商品や地域となり、それこそが、観光だけでなくまちづくりにおける資源となっているのが、水俣市だと思う。

水俣市の取り組みは、元気村条例、環境 ISO、勝手にまちづくり委員会の取り組み等々、どれもが市民一人ひとりに視点を置いて、必ず市民が動く仕組みなるよう、とても丁寧設計されていた。結果がたまたまそうなのではなく、そこに至るまでの、市民と一対一で向き合ってきた過程があってこそその取り組みだ。

以下に水俣での素晴らしい資源となる方々のお話を自分なりにまとめる。

杉本家と水俣病

最初にあったのは、水俣病語り部、ちりめん漁等兄弟で漁を行い加工販売を行っている環境マイスターの杉本肇さん。

本当に身を切るような思いで家族の水俣病との戦いを幼いころから見て育った杉本さん。子ども同士で水俣病に対する差別・いじめにあわなかったかとの問いに、問題が大きすぎて子ども心に触れてはいけない空気を皆が感じ取っていたから、なかったのだと言う。しかし、それはいいことでは決してなく、話題にできない、葬りたいこととして苦しみを表に出す場がないことを表している。だからこそ、子ども達が勇気を持って語れるようにすること、体験を語るのはつらいけど、それが大人の務めだと言う杉本さん。振り切って語り部になったきっかけは、話を聞いてくれた人が泣いてくれた、葬りたい出来事だった自分の体験に涙を流して共感してくれる人がいた、自分の経験も捨てたものではないと感動したという。

私は水俣の苦しみを体験することはできない、しかし共感することはできる。共感した

ことが体験した当事者の行動のきっかけになりえる。いかに伝えることが大切なのか、このやり取りで学ばせていただいた。

施設の地元学、あるもの探し実践水俣病資料館

次に訪れた水俣病資料館は、入口から出口のことを教示してある場所だった。暗さは微塵もない。伝えたいことが明確に示されていた。「過去に学び、ここに生きる希望をつくる」この資料館は、施設の地元学を実践している。施設のあるもの探しをし、施設の職員があるもので、さまざまな工夫をして展示をしている。

その中の一つでもある全国の資料館としては例がないといわれる、個人の家族の50年を展示。杉本家の水俣病50年の軌跡を展示したコーナーには、海の男、男前二人の笑顔の写真。「この笑顔のわけが知りたいか」母ちゃん泣くな！母ちゃん笑え！水俣病認定の母親を子ども達が支えた。こうして育った彼らは今も「やうちブラザーズ」として、多くの人に笑顔を届けている。

天の製茶園

次に向かったのは天の製茶園。こちらも地元学の実践をされている環境マイスター、天野茂さん、浩さん親子。あいにくの雨で、お茶園の見学はできなかったが、囲炉裏の小屋で、囲炉裏で火と食べ物を囲んでの対話は、非日常の空間が演出され、水俣で出会いと体験をより鮮烈で忘れ難いものにした。

出口を考えた農業を、と、既存の流通に頼らない独自の販路を作りだし、顔の見える生産と販売を行っている。他と同じことをしても売れない、農協の悪口を言ってもだめ。違うことをしなければ。他の産地と比較しない、とにかく安全でおいしいお茶を作るとして、リウマチで味覚が敏感な母の味利きにより、日本の紅茶を変えたと言われるほどの紅茶を作りだしている。きっと大変なことも多いと思うがとても楽しそうに話してくださっていたことが印象的だった。

頭石の地域まるごと生活博物館

地域のことは地域で何とかしなければと、試行錯誤していた時に市から元気村条例の話聞き、いくら説明を聞いてもわからない、とにかくやってみようと、村丸ごと生活博物館の取り組みを始めた。

初の取り組みだったこともあり、妬みもいやがらせもかなり受けた。しかし、行政に言われたから、始めたのではなく、その前から自分たちでなんとかしようとしてきたのだからと、屈することなく続けたとのこと。

何も無い、あたりまえだと思っていたものが、外部からの視点が入ることにより、それが当たり前ではなく、そこにしかないもの、宝物だと地域の人気がついていく。来てくれる人のためにより良い地域にと、住んでる人が動き出す。実際にご案内いただきながら、見て回ると、大げさにはなくちょっとだけ工夫された庭や、空き地をおもてなし料理のために畑にしたところなど、村の化粧と工夫が見られる。

何よりそれを誇りに思いながら説明してくださる勝目さんをはじめとした、頭石のみなさんが素敵だった。

吉井正澄元水俣市長のお話

私たちからの91の質問にすべて答えるという形でお話をくださった。その姿勢がすでに市民一人一人と向き合う自治を実践してこられたことを物語っていた。

水俣病患者に対する公式謝罪は、いま流行りのように行われている謝罪会見とは全く質が違う。吉井市長は謝罪文を事前に水俣病患者に見せ相談している。内容よりも市が相談したことに対して、理解を得られた。反対意見の垣根を越えて新しい価値観を共有していくために、謝罪は必要だったと語る。

その後の市政にも貴かれている、この姿勢があったからこそ水俣市がほかのどの町も国もできていない、公害からの再生が出来たのだと思う。

ごみ減量女性連絡会議

ごみ減量女性連絡会議の沼田悦子さんのお話から、素晴らしい女性パワーをもらった。ごみの分別の取り組みもすごいが、分別してもごみは減らない、もっとも大切なことは、ごみを出さないことだと、スーパーに対してトレイ必要ない品目を調査し、取り組みを始められたこと。それも一か所ではなく市内の各店舗を調査してまわられた。この難しいと思われる取り組みも、話しあいばかりでは、前に進まないからとにかくやってみてもらい、結果売り上げが減らなかったことから、廃止に繋がった。

女性ならではの視点で楽しくやっているとお話が印象的だった。だれでも会議に入れるが、理屈っぽいから男性はだめ、女性だけというのも成功の秘訣のようだ。また、当時事務局をされた職員から、私たちは場を作っただけ、意見を記録し参加者で共有しただけと言われる。行政からの押し付けにならない会議を工夫されたていらしたと思う。

水俣中央商店街の取り組み

まず市役所有志が勝手にまちづくり委員会を立ち上げ、土日閑散とした商店街を何とかしようと始めた、ということに驚きである。

部活みたいなイメージで活動し、お菓子屋さんが多いからお菓子で何かやろうと、勝手にお菓子屋さんを集め、会議を行政に対する不満が出るなか聞き役にまわり、打ち解けるまで待って、はじめた。スイーツのあるもの探し、地元学の実践をされたようだ。地域に入るときの心構えとして、関係ない話でもまず話を聞くこと。そして話す前から、自分の意見とは違うことを前提に、入っていくこと。マイナスから0まで持っていく、そこまで来たらあとはプラスになるだけだと言う。ポジティブな姿勢もコツなのかもしれない。

実際の商店街のお店の方たちはどう思っているんだろう、正直めんどくさいと感じているのか疑問だったが、とてもいい信頼関係が築かれていた。市全体、市職員全体のこととして動いたと言うよりは、一人の一緒にやってくれた職員に認めてもらいたいからやっているんだと、商店街でケーキ屋を営む方からのお話もあった。ここまで信頼される職員を本当に見習わなければと思うお話しだった。